

高梁川流域キッズ

たかはしがわりゆういき

高梁川流域ゆかりの

いじん けんじん とくしゅう

偉人・賢人特集



活躍した年:

1835~1896年



活躍した分野:

漢学者



ゆかりのある場所など:

- ・備中松山城
- ・歴史美術館
- (文化交流館)
- ・板倉勝静
- ・山田方谷



かわた おこう
川田 甕江

新高総早 倉敷市
見梁社島 掛原口庄岡
市市市町 町市市町市



かわたおこう てんぼう ねん いま くらしきしたましあがさき う
川田甕江は、天保6（1835）年、今の倉敷市玉島阿賀崎に生まれました。
たましま じゅがくしゃ かまたげんけい まな げんけい おこう さいのう きづ えど ゆうがく すす
玉島で儒学者の鎌田玄溪に学びましたが、玄溪は甕江の才能に気付いて江戸への遊学を勧
めました。江戸では、昌平覺に入って古賀茶溪（儒官・漢学者・洋学者）と大橋訥庵（儒学者）
のもとで学びました。この頃、松山藩主の板倉勝静は山田方谷に藩財政の立て直しを命し
ていましたが、あんせい ねん さい とき びちゅうまつやまはん はんじゅ つか
安政4（1857）年、28歳の時に備中松山藩に藩儒として仕えることにな
りました。

おこう どうかく みしまちゅうしゅう とも ほうこくもんか そうへき いた はん
甕江はすぐに頭角をあらわし、三島中洲と共に方谷門下の双壁をなすに至りますが、藩を
と ま かんきょう きび ま おこう まつやまはん きき の き こうれい ほうこく
取り巻く環境はしだいに厳しさを増し、甕江は松山藩の危機を乗り切るため、高齢の方谷の
てあし かつやく けいおう ねん ぼしんせんそう さい おかやまはん ようきゅう
手足となって活躍しました。慶応4（1868）年の戊辰戦争の際、岡山藩の要求によって
はんべい たいちょう じゅうちんくまたあたか せきにと せつぶく か ほか はんし つみ めんじょ
藩兵の隊長であった重臣熊田恰が責任を取って切腹する代わりに他の藩士の罪を免除させる
ということになったとき、おこう めつけやく たちあ はんし じょめい ちから つ
甕江は目付役として立会い、藩士たちの助命に力を尽くしました。

めいじいしんご まつやまはん そんぞく みとど じょうきょう ふかがわ じゅく ひら おお もんじん あつ
明治維新後に松山藩の存続を見届けると上京して深川に塾を開き、多くの門人を集めまし
た。おこう ちゅうしゅう さつましゅっしん しげのやすつぐ なら めいじ さんだいぶんそう ひとり かぞ
た。甕江は中洲と薩摩出身の重野安繹と並んで、「明治の三大文宗」の一人にも数えられました。

のちには政府に仕えることになり、だいがくしょうはかせ あと とうきょうていこくだいがくきょうじゅ きそくいんぎん
のちには政府に仕えることになり、大学小博士、その後、東京帝国大学教授、貴族院議員
れきにん のち たいしやうてんのう どうぐうじこう つと ばんねん かつきよ たびたびたず しんらい
などを歴任、後の大正天皇の東宮待講も務めました。また晩年の勝静を度々訪ね、その信賴
あつ
も厚かったそうです。